

巻頭言

■雨ニモマケズ!



徳島大学薬学部長

佐野茂樹

Sano Shigeki

米 国共和党のトランプ氏が大統領選挙で当選を確実にし、勝利演説を行ったのは2016年11月9日(水)のことです。同じ年の11月30日(水)に私が薬学部長に選考されてから4年が経過し、当時は予想だにできなかった新型コロナウイルスが世界中に蔓延する中、任期も残すところ数ヶ月となりました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で状況は日々刻々と変化していますが、受験シーズンを間近に控え、薬学部では感染予防対策に万全を期して入学試験の準備を進めています。

大学ではコロナ禍のため様々な対応を余儀なくされていますが、今年はオープンキャンパスも中止となり、オンラインでの動画配信が導入されました。昔はインターネットもなければオープンキャンパスもなく、高校生が大学のカリキュラムを知ることや大学の雰囲気を感じることが容易ではありませんでした。ところが幸いに

も、私は高校在学中に大学のキャンパスを訪れる機会に恵まれました。確か高校2年生の時だったと記憶しています。大学の具体的なイメージなど皆無でしたが、博士の学位取得を目指して大学院に在籍する高校の先輩に、研究室を案内していただきました。博士の学位に関する知識も皆無でしたが、「博士号というのは足の裏の米粒と同じで、取らないと気持ち悪いけれど取っても食えない」という小唄のような説明を聞いて、ますます分からなくなりました。私が訪問したのは石井象二郎先生が主宰されている農学部の研究室です。実験に使用する無数のゴキブリが、空調完備の部屋の中で大切に飼育されていました。ゴキブリは嗅覚の優れた昆虫で、他のゴキブリに影響を与える物質、すなわちフェロモンというものを放出します。膨大な数の雌のゴキブリから抽出して得られた物質を濾紙に垂らすと、雄のゴキブリが集まり羽を広げて振動させました。性フェロモンと呼ばれる物質によるゴキブリの配偶行動です。また、ダニが一面を覆っているシャーレの真ん中をガラス棒でつつくと、その周りのダニが一瞬にして円形に遠ざかりました。ダニをつぶすことで放出された警報フェロモンと呼ばれる物質によるダニの逃避行動です。昆虫が生合成する化学物質のはたらきの不思議さと、同じ物質を人間が化学合成しても作用は同じという解説がとても印象的でした。偶然お目にかかった石井先生からは、「頑張ってください」と声をかけていただきました。ゴキブリの実験の見学という予備知識だけで、石井先生のこ

とは全く知らなかったのですが、先生からのひと言で頑張ろうという意欲がふつつつ湧き上がってきました。ゴキブリのフェロモン研究などで国際的に高く評価され、昆虫生理学の第一人者であられた石井象二郎先生が停年退官される前年のことです。その日の小さな体験は、大学教員として教育研究に携わることになる大きな要因の一つだったのかもしれませんが。

さて、薬学部だよりの巻頭言を執筆させていただくのも8回めとなり、今回は私にとっての最終回です。とりとめのない昔話になってしまいましたが、事あるごとに読み返している宮澤賢治の「雨ニモマケズ」を引用して筆を擱きたいと思います。多くの難題が山積していますが、残された数ヶ月も「テクノポー精神」で全力を尽くして頑張りたいと願っている次第です。

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシヅカニワラッテキル
(中略)
ヒドリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サイフモノニ
ワタシハナリタイ